



仲間と共に



令和4年度 <三輪南小 学校だより>

令和4年8月30日

「青春ってすごく密なので」・・・

校長 小野木 義浩

夏休み後半、放課後児童クラブ「ひまわり」の教室をのぞくと、子供たちが笑顔で話しかけてくれました。「校長先生。わたしすごく元気だったよ。」「ぼくの夏休みの宝物をぜひ見てください。」「遠くには行かなかったけど、家でバーベキューをしたよ。」などと話がとまりません。コロナ禍ではありましたが、子供たちの思い出深い夏休みの様子の一部が目に浮かんできました。また、子供たちの表情や話しぶりから、夏休み明けもがんばるぞという意欲も同時に伝わり、うれしく思いました。

この夏休みを振り返ると、休みに入ったとたん、新型コロナウイルス感染症の新規感染者数が爆発的に増えました。先日は岐阜県でも過去最高で5千人をこえ、驚かされました。そんな中、3年ぶりに行動制限のない夏休みは、各種イベントも感染対策をしながら数多く開催されました。

「コロナ禍の夏の高校野球甲子園大会」に注目が集まりました。今回、甲子園で闘った球児たち、今年3年生だった全国の高校生たちは、高校入学時からコロナ禍でした。2020年の春のセンバツ大会中止から、夏の大会中止、センバツ出場内定校同士の無観客での交流試合、21年の夏の大会では出場校のうち2校がやむなく出場辞退、この夏の大会も感染者や濃厚接触者による選手の入替え、日程の入替えなど様々なことが起こりました。ご存じの通り、地元出場校の県立岐阜商業もコロナ感染の影響を大きく受けましたね。

東北勢で初めての優勝を飾った仙台育英高校の監督の優勝インタビューも話題になりました。（入学時から、コロナ禍に翻弄される日々を送ってきた3年生について）「入学どころか恐らく中学の卒業式もちゃんとできなくて、高校生活というのは、僕たち大人が過ごしてきた高校生活とは全く違う。**青春ってすごく密なので**、でもそういうことは全部ダメだと言われて。活動していても、どこかでストップがかかってしまうような苦しい中で、でも本当にあきらめないでやってくれた」、「でも、それをさせてくれたのは、僕たちだけじゃなくて、やっぱり全国の高校生のみんなが本当によくやってくれて。今日の（対戦相手の）下関国際さんもそうですけど、大阪桐蔭さんとか、目標になるチームがあったから、どんな時でも諦めないで、暗い中でも走っていったので、本当に全ての高校生の努力のたまものが、ただただ最後、僕たちがここに立ったというだけなので、ぜひ全国の高校生に拍手をしてもらいたいと思います。」



さて、高校生に限らず、小学生の子供たちも同様です。監督さんの言葉を借りれば、**元来、「小学生ってすごく密」**なので・・・小学生の子供たちは顔や口に出さなくても、依然として新型コロナウイルスへの不安や我慢をしながら、登校したり学習したり、家庭生活したりしているということ、また、夏休み明けは、生活リズムの変化に適應しにくく、子供の心身の不調がみられる傾向が強いということを認識する必要があります。わたしたち教職員はもちろん、周りの大人がその認識をもち、あせらず、ゆっくり、子供たちを観て、寄り添って関わっていくようにすることが子供の安心につながります。9月以降いろいろな行事や取組を予定しています。これまで同様に対策をしながら、子供たちと一緒に「自分たちの力でコントロールできること」を考え、しっかりと行っていきます。ご理解・ご協力をお願いいたします。